

【論文】

大分市の戦災復興に関する調査研究 その4  
-林房雄による復興大分市と上田保の評価について-  
A Study on the Post-war Reconstruction of Oita city

日高 圭一郎\*<sup>1</sup>  
Keiichiro HITAKA

**Abstract :** This paper has mentioned about the evaluation of Oita city after the post-war reconstruction and UEDA Tamotsu, a mayor of Oita city who led its reconstruction. The evaluator is HAYASHI Fusao, novelists. It was understood from this study that original idea of Mayor UEDA is highly evaluated.

**Keywords :** *Post-war Reconstruction, Oita city, UEDA Tamotsu, HAYASHI Fusao, Nihon Haiken, The Asahi weekly edition*  
戦災復興, 大分市, 上田保, 林房雄, 日本拝見, 週刊朝日

1. はじめに

これまで、筆者は戦災復興後の大分市(以下、復興大分市という。)と、復興を主導した上田保大分市長(以下、上田という。)が、当時、どのように評価されていたかについて、収集できた文献情報等に基づき、考察を行ってきた。

2021年度の拙稿<sup>1)</sup>においては、当時の文化人等による評価について考察を行った。本稿では、その中の一人である大分市出身の小説家である林房雄<sup>註1)</sup>(以下、林という。)の復興大分市に関する評論について詳細に分析し、考察を行っている。

分析と考察の対象とした林の評論は、「日本拝見 64 大分市・未完成小型文化都市」<sup>2)</sup>である。この評論は、「週刊朝日」の「日本拝見」シリーズ(表1(1)~(4)参照)の一編である。「週刊朝日」の昭和30年1月16日号に掲載されたものである。

2. 「週刊朝日」の「日本拝見」シリーズ<sup>3)4)</sup>について

この「日本拝見」シリーズは、「週刊朝日」の昭和28年11月1日号から昭和32年6月30日号まで、計145回連載されたルポルタージュ記事である。その内容は紀行文であり、著名な作家やジャーナリストなど18名が代わるがわる日本各地を訪問し、取材を行い、執筆している。

また、文章にくわえて、訪問地の風景を撮影したグラビア頁がもうけられており、当時の日本各地の状景を伝えた貴重な史料となっている。

編集者としては「戦後の日本地図はどう変わったか」を狙いとした企画であり、当時の日本地理風俗体系を目指したシリーズであった。

記事名称は、昭和28年11月1日号から昭和30年12月25日号までは「日本拝見」、昭和31年1月1日号から昭和31年12月16日号では「日本の断面」、昭和32年新年増大号から昭和32年6月30日号までは「新日本拝見」と変更されているが、シリーズ全体を総称して「日本拝見」といわれている。

この「日本拝見」シリーズは、1957年に「日本拝見 東日本編」<sup>3)</sup>、1958年には「日本拝見 西日本篇」<sup>4)</sup>として、角川書店より単行本化されている。

林は、「日本拝見」全145回のうち大分市を含めて9回執筆をしている(表1(2)~(3)網掛け箇所)。具体的には「高山」「宮崎」「大分」「大津」「福島」「山形」「対馬」「天草」「壱岐」を訪問し、執筆している。

林が執筆した回に共通する特徴は、訪問地の当時の状景を伝えることにくわえて、その地の歴史、風土、民俗にまで言及した評論となっている点である。

\*1 建築都市工学部建築学科

表1(1) 「日本拝見」シリーズ(第1~第43回)<sup>3), 4), 5)</sup>

	訪問地	表題	著者	号	記事名称
1	宇治山田	女神の都	大宅壮一	昭和28年11月1日号	日本拝見
2	青森	裸の町	浦松佐美太郎	昭和28年11月8日号	日本拝見
3	佐世保	運命の“軍都”	大宅壮一	昭和28年11月15日号	日本拝見
4	水戸	丘の上の町	浦松佐美太郎	昭和28年11月22日号	日本拝見
5	大牟田	三井の町	大宅壮一	昭和28年11月29日号	日本拝見
6	松本	アルプスの見える町	浦松佐美太郎	昭和28年12月6日号	日本拝見
7	堺	日本一の町	大宅壮一	昭和28年12月13日号	日本拝見
8	横浜	真空の町	門田 勲	昭和28年12月20日号	日本拝見
9	新宮	アメリカ村	大宅壮一	昭和28年12月27日号	日本拝見
10	東京	東京の享楽街	門田 勲、花森安治、 大宅壮一	昭和29年新年増大号	日本拝見
11	別府	サルがいる“泉都”	大宅壮一	昭和29年1月10日号	日本拝見
12	札幌	ラーメンの町	花森安治	昭和29年1月17日号	日本拝見
13	尾張 一宮	ファッションを織る	浦松佐美太郎	昭和29年1月24日号	日本拝見
14	野田	醤油藩の城下町	大宅壮一	昭和29年1月31日号	日本拝見
15	鎌倉	斜陽のブンカ都市	門田 勲	昭和29年2月7日号	日本拝見
16	新潟	街の動脈天然ガス	浦松佐美太郎	昭和29年2月14日号	日本拝見
17	京都	優にやさしき「進歩性」	門田 勲	昭和29年2月21日号	日本拝見
18	鹿児島	封建主義最後のトリデ	大宅壮一	昭和29年2月28日号	日本拝見
19	尼崎	盛大な煙、工場の百貨店	花森安治	昭和29年3月7日号	日本拝見
20	会津 若松	白虎隊へのノスタルジア	浦松佐美太郎	昭和29年3月14日号	日本拝見
21	松江	昔変らぬ「名門」の町	花森安治	昭和29年3月21日号	日本拝見
22	盛岡	大砲からバターへ	浦松佐美太郎	昭和29年3月28日号	日本拝見
23	宇都宮	徹底した中央集権	大宅壮一	昭和29年4月4日号	日本拝見
24	川崎	大師サマと競輪サマ	門田 勲	昭和29年4月11日号	日本拝見
25	高知	酒と短期と台風の町	浦松佐美太郎	昭和29年4月18日号	日本拝見
26	神戸	唄のない街	門田 勲	昭和29年4月25日号	日本拝見
27	宇和島	日本の終着駅	大宅壮一	昭和29年5月2日号	日本拝見
28	芦屋	ゆたかなオゾン、あまい風	花森安治	昭和29年5月9日号	日本拝見
29	徳島	大阪の郊外都市	浦松佐美太郎	昭和29年5月16日号	日本拝見
30	萩	見はてぬ夢の町	大宅壮一	昭和29年5月23日号	日本拝見
31	名古屋	偉大なる田舎町	門田 勲	昭和29年5月30日号	日本拝見
32	富山	大阪的商業都市	大宅壮一	昭和29年6月6日号	日本拝見
33	日光	拝観料でもつ町	門田 勲	昭和29年6月13日号	日本拝見
34	秋田	東北の文化村	大宅壮一	昭和29年6月20日号	日本拝見
35	和歌山	七不思議の町	花森安治	昭和29年6月27日号	日本拝見
36	酒田	東北の“堺市”	大宅壮一	昭和29年7月4日号	日本拝見
37	因島	船と除虫菊の町	浦松佐美太郎	昭和29年7月11日号	日本拝見
38	金沢	斜陽化した“百万石”	大宅壮一	昭和29年7月18日号	日本拝見
39	博多	二つの顔を持った町	門田 勲	昭和29年7月25日号	日本拝見
40	尾道	牛と機帆船	浦松佐美太郎	昭和29年8月1日号	日本拝見
41	浦和	汽車の停まらぬ県庁所在地	花森安治	昭和29年8月8日号	日本拝見
42	広島	変わらないのは川だけ	門田 勲	昭和29年8月15日号	日本拝見
43	軽井沢	商魂たくましい“聖地”	浦松佐美太郎	昭和29年8月22日号	日本拝見

表1(2) 「日本拝見」シリーズ(第44～第87回)<sup>3), 4), 5)</sup>

	訪問地	表題	著者	号	記事名称
44	鳥取	災害のたびに容姿一新	信太澄夫	昭和29年8月29日号	日本拝見
45	彦根	古い美しい城下町	花森安治	昭和29年9月5日号	日本拝見
46	仙台	はげた「杜の都」	門田 勲	昭和29年9月12日号	日本拝見
47	小樽	石炭と木材の港	伊藤 整	昭和29年9月19日号	日本拝見
48	佐渡 相川	日本の五番目の島	門田 勲	昭和29年9月26日号	日本拝見
49	天理	天理財閥の寄生都市	臼井吉見	昭和29年10月3日号	日本拝見
50	長野	善光寺まいり	荒垣秀雄	昭和29年10月10日号	日本拝見
51	高山	生き残った町	林 房雄	昭和29年10月17日号	日本拝見
52	熊本	「もっこす」の町	門田 勲	昭和29年10月24日号	日本拝見
53	甲府	ブドウ畑と水晶造り	井伏鱒二	昭和29年10月31日号	日本拝見
54	福井	なんでもある町	浦松佐美太郎	昭和29年11月7日号	日本拝見
55	函館	イカつけ文化の町	臼井吉見	昭和29年11月14日号	日本拝見
56	佐賀	わら屋根の城下町	花森安治	昭和29年11月21日号	日本拝見
57	熱海	ドテラの町	門田 勲	昭和29年11月28日号	日本拝見
58	八戸	南部センベイの味	浦松佐美太郎	昭和29年12月5日号	日本拝見
59	静岡	中の上の町	荒垣秀雄	昭和29年12月12日号	日本拝見
60	下関	落日の海峡町	花森安治	昭和29年12月19日号	日本拝見
61	宮崎	神話と台風の町	林 房雄	昭和29年12月26日号	日本拝見
62	大阪	「たこ焼き」の町	門田 勲	昭和30年新年増大号	日本拝見
63	松山	句碑の町	伊藤 整	昭和30年1月9日号	日本拝見
64	大分	未完成小型文化都市	林 房雄	昭和30年1月16日号	日本拝見
65	千葉	日日是好日の町	花森安治	昭和30年1月23日号	日本拝見
66	高松	海で得をしている町	伊藤 整	昭和30年1月30日号	日本拝見
67	高崎	空っ風の気質	荒垣秀雄	昭和30年2月6日号	日本拝見
68	津山	追憶に生きる町	臼井吉見	昭和30年2月13日号	日本拝見
69	サン・パウロ	郷愁で生活する町	大宅壮一	昭和30年2月20日号	日本拝見
70	岐阜	さまざまの要所	浦松佐美太郎	昭和30年2月27日号	日本拝見
71	ブエノスアイレス	サムライ銘々伝	大宅壮一	昭和30年3月6日号	日本拝見
72	長崎	二つの顔を持った町	門田 勲	昭和30年3月13日号	日本拝見
73	ホノルル	夢の中の日本	大宅壮一	昭和30年3月20日号	日本拝見
74	新居浜	「住友さん」の町	臼井吉見	昭和30年3月27日号	日本拝見
75	松坂	牛肉と本居宣長	浦松佐美太郎	昭和30年4月3日号	日本拝見
76	奈良	「オブジェ」のある町	門田 勲	昭和30年4月10日号	日本拝見
77	立川	基地の町	伊藤 整	昭和30年4月17日号	日本拝見
78	大津	近江八景と人絹の町	林 房雄	昭和30年4月24日号	日本拝見
79	ペルー	禁日本人入国	大宅壮一	昭和30年5月1日号	日本拝見
80	メキシコ	日系大物列伝	大宅壮一	昭和30年5月8日号	日本拝見
81	習志野	戸惑っている町	荒垣秀雄	昭和30年5月15日号	日本拝見
82	呉	最大の失業都市	臼井吉見	昭和30年5月22日号	日本拝見
83	岡山	早寝の町	門田 勲	昭和30年5月29日号	日本拝見
84	浜松	東西の交流点	荒垣秀雄	昭和30年6月5日号	日本拝見
85	八幡	鉄の町	浦松佐美太郎	昭和30年6月12日号	日本拝見
86	藤沢	東京の植民地	渡辺紳一郎	昭和30年6月19日号	日本拝見
87	小豆島	日本の縮図	大宅壮一	昭和30年6月26日号	日本拝見

表1(3) 「日本拝見」シリーズ(第88~第131回) 3), 4), 5)

	訪問地	表題	著者	号	記事名称
88	富士周辺	山へ登った四つの市	門田 勲	昭和30年7月3日号	日本拝見
89	桐生	織物の町	荒垣秀雄	昭和30年7月10日号	日本拝見
90	横田基地界限	追いつめられた瑞穂・砂川町	白井吉見	昭和30年7月17日号	日本拝見
91	弘前	伝統の息づく町	今日出海	昭和30年7月24日号	日本拝見
92	久留米	田園交響曲	浦松佐美太郎	昭和30年7月31日号	日本拝見
93	福島	県庁と果樹園の町	林 房雄	昭和30年8月7日号	日本拝見
94	十和田	豪放と繊細の美	今日出海	昭和30年8月10日号別冊	日本拝見
95	網走周辺	秘境・知床半島	大宅壮一	昭和30年8月21日号	日本拝見
96	上高地	男でも登れます	浦松佐美太郎	昭和30年8月28日号	日本拝見
97	山形	煙突のない町	林 房雄	昭和30年9月4日号	日本拝見
98	阿寒国立公園	日本ばなれした景観	大宅壮一	昭和30年9月11日号	日本拝見
99	諏訪	精密工業の王国	荒垣秀雄	昭和30年9月25日号	日本拝見
100	石巻	北上川の港町	白井吉見	昭和30年10月2日号	日本拝見
101	米子	山陰の商都	信太澄夫	昭和30年10月9日号	日本拝見
102	米沢	「節儉と遺産」の町	白井吉見	昭和30年10月16日号	日本拝見
103	津	観海流発祥地の水難	伊藤 整	昭和30年10月23日号	日本拝見
104	小田原	“天下のケン”の玄関口	渡辺紳一郎	昭和30年10月30日号	日本拝見
105	柏崎	蒐集狂の町	門田 勲	昭和30年11月6日号	日本拝見
106	淡路島	日本の縮図	伊藤 整	昭和30年11月13日号	日本拝見
107	対馬	風の中の島	林 房雄	昭和30年11月20日号	日本拝見
108	前橋	座繰りの町	荒垣秀雄	昭和30年11月27日号	日本拝見
109	佐久間ダム	人間と機械の交響曲	大宅壮一	昭和30年12月4日号	日本拝見
110	天草	夢と幻滅の島	林 房雄	昭和30年12月11日号	日本拝見
111	壱岐	海幸山彦の島	林 房雄	昭和30年12月18日号	日本拝見
112	日本列島	ボディ・ビル日本	大宅壮一	昭和30年12月25日号	日本拝見
113	大内山	もっと人間的に	大宅壮一	昭和31年1月1日号	日本の断面
114	アメリカ大使館	もう一つの政府	大宅壮一	昭和31年3月4日号	日本の断面
115	ソ連代表部	七人のサムライ	大宅壮一	昭和31年4月15日号	日本の断面
116	祇園	封建的自給社会	大宅壮一	昭和31年5月27日号	日本の断面
117	学習院	旧華族に代る“肩書族”	大宅壮一	昭和31年8月12日号	日本の断面
118	江東楽天地	東京の宝塚	大宅壮一	昭和31年10月7日号	日本の断面
119	農林省	ピンからキリへの陳情団	大宅壮一	昭和31年12月16日号	日本の断面
120	釧路	大いなる運命の港	浦松佐美太郎	昭和32年新年増大号	新日本拝見
121	琴平	東洋のサン・マリノ	大宅壮一	昭和32年1月13日号	新日本拝見
122	稚内	サカナとレンガと名物市長	中野好夫	昭和32年1月20日号	新日本拝見
123	千里山	大阪大陸のサラリーマン半島	大宅壮一	昭和32年1月27日号	新日本拝見
124	室蘭	働くものの町	浦松佐美太郎	昭和32年2月3日号	新日本拝見
125	串本	観光事業は「ケ・セラ・セラ」	渋沢秀雄	昭和32年2月10日号	新日本拝見
126	千歳	たち切れない基地との宿縁	中野好夫	昭和32年2月17日号	新日本拝見
127	小倉	北九州の金融街	門田 勲	昭和32年2月24日号	新日本拝見
128	内灘	その得たもの、失ったもの	大宅壮一	昭和32年3月3日号	新日本拝見
129	唐津	災害のない町	門田 勲	昭和32年3月10日号	新日本拝見
130	四日市	将来の大工業都市	浦松佐美太郎	昭和32年3月17日号	新日本拝見
131	氷見	文字通りの“農山漁市”	大宅壮一	昭和32年3月24日号	新日本拝見

表1(4) 「日本拝見」シリーズ(第132～第145回)<sup>3), 4), 5)</sup>

	訪問地	表題	著者	号	記事名称
132	大館	新しい街づくりの陣痛	中野好夫	昭和32年3月31日号	新日本拝見
133	舞鶴	日本の勝手口	浦松佐美太郎	昭和32年4月7日号	新日本拝見
134	鎌倉	“北条高時以来”の空白	小林秀雄	昭和32年4月14日号	新日本拝見
135	郡山	無様式都市	中野好夫	昭和32年4月21日号	新日本拝見
136	清水	マグロとミカン	浦松佐美太郎	昭和32年4月28日号	新日本拝見
137	桜島	ゆたかな村、苦しむ村	中島健蔵	昭和32年5月5日号	新日本拝見
138	東海村	新日本の誕生地	崎川範行	昭和32年5月12日号	新日本拝見
139	伊賀 上野	伊賀の京都	門田 勲	昭和32年5月19日号	新日本拝見
140	延岡	どこに行っても旭化成	中島健蔵	昭和32年5月26日号	新日本拝見
141	宇治	ほっとしている町	門田 勲	昭和32年6月2日号	新日本拝見
142	成田	“陸上傷害保険会社”	大宅壮一	昭和32年6月9日号	新日本拝見
143	山口	安定した町	浦松佐美太郎	昭和32年6月16日号	新日本拝見
144	筑波山	ガマの油とその風土	大宅壮一	昭和32年6月23日号	新日本拝見
145	三次	表と裏をつなぐ町	浦松佐美太郎	昭和32年6月30日号	新日本拝見

### 3. 「日本拝見 64 大分市・未完成小型文化都市」<sup>2)</sup>の分析と考察

林は1903年(明治36年)に大分市で生まれている。旧制・大分県立大分中学校(現・大分県立大分上野丘高等学校)を修了するまで大分市中心部で育っている。林が知る明治期から大正期の大大分と、戦災復興後の大大分の対比に基づき評論がなされている。

この評論は4部構成となっており、「焼けぶとり」「小公園の町」「奇妙な底力」「名物も創作」の小見出しがつけられている。文章中には、大分市の市章と当時の遊歩公園の風景を撮影した写真が図版としてレイアウトされている。グラビア頁には、大分県の特産品であるしいたけの取引の様子、大分川にかかる舞鶴橋の袂からの大分の風景、茵苜の港の風景、大分市東部火葬場の内観を撮影した写真がレイアウトされている。撮影者は朝日新聞社のカメラマン吉岡専造<sup>注2)</sup>である。

#### (1) 各部についての考察

以下、評論に沿い、各部についての考察を示す。林の評価を理解する上で重要と考えられる部分には、下線を引いている。

##### 焼けぶとり

別府という国際的温泉都市のかげに小さくかくれて、何十年間、つましく暮らして来たような町。

「大分というのは、長崎のもっと先でしたね」

「いや、別府温泉のすぐ隣ですよ」

「ああ、そうでしたね。これは失礼！」

「どういたしまして」

ウソでも作り話でもない、私はこの町の出身なので、

これまでに何度もこんなトンチンカンな会話をさせられた。

どうも裏九州は、日本人の地理概念をこんがらからせる傾向があるようだ。

「宮崎県？ ああ仙台のある県ですね」

これも作り話ではない。

愛郷心を先に立てては、「日本拝見」の趣旨にそむくかもしれないが、私が中学生としてこの町に住んでいたころには、有名すぎる別府に対して、中学生流のプライドのようなものを持っていた。「大分には、城があり、県庁があり、中学があり、高商があり、鉄道の分岐点で、物資の集散地で、紡績、製糸、セメント工場があり、その上、大友宗麟以来の伝統と文化がある。別府には、そんなものは一つもない。あるものは温泉と宿屋とお女郎屋ばかりじゃないか！」

にもかかわらず、一步県外に出るわ、わが愛する大分市は、別府温泉のかげに小さくかすんでしまう。「別府の隣だよ」と注釈をつけなければ、だれも思い出してくれない。しかも、私が郷土に長いごぶさたをつづけている間に、別府はますます有名になり、温泉都市としての設備も完備し、人口も大分をはねこし、名実ともに大別府になってしまったらしい。

「大分はどうなっていることだろうか？聞けば戦災をうけて、町の大半は焼け野原になったという。復興したと言っても、昔から景気のいい町ではなかったから、たいしたことはないかもしれぬ。三十年ぶりに、みじめな生まれ故郷の姿を見せられるのだとしたら、つらい話だぞ」

冒頭で、林は大分の知名度の低さを述べている。比較対

象として隣接する国際的温泉都市の別府をあげ、大分は適当に歴史のある城下町で、県庁所在地であるにも関わらず、知名度の低いことを嘆く中学生時分の心情を述懐している。その状況を惜しみながら、取材時には別府がさらに発展していることを現実として受け止めざるを得ない状況になっている。

筆者を含めて大分市で生まれ育った人間の多くは、概ね類似した心情や感情を持つ。しかしながら、この林の郷里に対する自虐的評価は、次節以降に示される復興大分市の評価をより強調するための伏線となっている。

汽車が国東半島の根元を横ぎり、車窓に別府湾の紺碧の色がうつりはじめると、私はだんだん胸さわぎをおさえることができなくなった。何と言っても、この南国の入江のながめは、私にとっては旧山河である。行きずりの旅人顔で、軽く「拝見」することはできない。もし、そんな顔をしたら、「この拝見記」全体がウソになる。

海の色と山の姿は、三十年前と少しも変わらず、なに一つ加らず、なに一つ減っていない。だが、大分の町の姿は変わっていた。昔のものはなに一つ残っていないと言いたいほどの変りかたであった。しかも、それはみじめな変りかたではない。昔の貧乏くささがなくなって、明るい、広々とした町に変わっていた。

この町から貧乏人がなくなったわけではなからう。裏町を探せば、かたむいた屋根とくずれた壁の、風通しの悪い、悪臭にみちた古い町筋ものこっているかもしれない。だが、滞在の三日間に、私が歩きまわったかぎりの町筋は、その最も古くて狭いものでさえ、昔にくらべると、広く明るくなっていて、うらぶれて物悲しい古い城下町の臭いはなくなっていた。

日本には、戦災で焼けた町が八十以上ある。その中のいくつかの町は、焼けてかえって美しくなった。例えば横浜は昔の美しい面影を失ってしまったが、東京は日一日と美しくなりつつある。大分もまた、小さいながら、焼けたおかげで美しくなった町の一つにちがいない。焼け肥りのできる活力と底力を内にたくわえていた頼もしい町の一つらしい。

林は車窓から、別府湾をはじめとする郷里の自然風景が変わっていないことを確認する。それに対して、大分の町の風景は大きく変わり、「うらぶれて物悲しい古い城下町」ではなくなっていることを認識する。

変わらない郷里の山河と、変貌した城下町の対比により、戦災復興の成果が強調されている。

大分市については戦災復興により、美しくなった町の一つであるとしている。林はそれを「焼け肥り」といい、それを可能する「活力」と「底力」を大分は保有していたと

評価している。

### 小公園の町

と言っても、人口十万をちょっと越えたばかりの地方都市だ。公平な第三者の眼には、日本のどこにでもある三流都市にすぎまい。「どんな町でも、三十年たてば三倍くらいにはなるよ。大分だけの話じゃないさ」と言われたら、「僕の居たころの人口三万五千の大分は、これ以上発展しそうな町には見えなかった。それが、ともかくも大きくなり、復興ぶりも全国三優秀都市の一つとして、建設大臣から表彰されたのだから喜んでいるのだよ」と私は答えよう。

町の到るところに、公園ができています。遊歩公園、若草公園、若竹公園、小鳩公園、ジャングル公園、墓地公園。――全部合わせても、東京の上野公園の半分にもならぬ街角の箱庭みたいな小公園だが、それでも芝生があり、花壇があり、並木があり、噴水があり、池があり、遊歩公園には「荒城の月」の作曲者滝廉太郎の銅像があり、郷土出身の朝倉文夫の力作「みどりのかげ」が白いはだをかがやかせている。

公園はできたがまわりの家並みは立ちそろわず、道路の舗装も完全ではないから、芝生も並木も白いホコリでよごれている。しかし、子供は道路で馬のクソまみれになり、電車にひかれそこね、他の庭にしのびこんではたたき出されていた私の少年時代を思い出すと、これらの小公園が光かがやいて見えて、おのずから微笑をさそうのだ。

ジャングル公園に集められた樹木は六百余种あり、一種類ごとに和歌や俳句を引用した、親切で文学的な解説がついている。この程度の植込みは、昔の富豪や大官の邸宅にはいくらかあった。だが、それが個人の独占物でなく、市民のため、子供のためであることが私はうれしい、「ジャングル公園」という大げさな名前も、実は子供たちがつけたものであり、樹木の保護と園内の清掃も小学生たちの手で行われていると聞いては、この小人のジャングルを笑うことはできない。

墓地公園は町の南側の海を見晴らす丘の上にある。場所は景勝の地だが、公園はまだ未完成だ。市内の寺の古い墓石の一部を、そのまま移してならべただけのものだから、名古屋の総合墓地の規模、横浜外人墓地の美観、東京多摩墓地の壮重さはない。ないのが当然で、墓地が墓地らしくなるにも、半世紀や一世紀の時間が必要だ。しかし、墓地をあえて公園と呼び、公園の設計を開始した上田大分市長の創意には敬意を表したい。墓地をいつまでもお化けと幽霊の住み家にしておく義務はない。墓地は市民の魂の最後の休息所だ。生きている市民が、ときどき祖先とともに、墓地の静寂と平和を楽しむことは、魂の健康のためになる。墓

地公園の着想は非凡だ。

同じで意味で、この町の火葬場も珍しかった。まるで山のホテルのロビーのように明るい。壁には天女の壁画が舞っていた。待合室は喫茶店に似ていて、庭にはコスモスが咲いていた。昔は焼き場と墓場は町の子供たちの二大恐怖であったが、今は市民の「休息所」の一つとなっている。

その他に、託児所、養老院、市営アパート、モデル中学校、体育館、競技場、市民プール――文化都市として必要なものはなんでも一通りでき上っているか、または建設中である。町の南北をつらぬくスピード・ウェイをつくるためのトンネル工事も目下進行中。私は市長さんに言った。

「まるで中共の町を案内されているみたいですね。なにかもできたてのホヤホヤのところが」

「必ずしも皮肉ではなかった。この勢いで十年もたったら、見事な小型文化都市のモデルができ上がるかもしれない。」

林は生まれ育った大分の町が美しくなり、人口も増え、発展していることを素直に喜んでいる。

次に、戦災復興の具体的成果としての小公園や、そこに設置されている銅像等を取りあげ、自らが育った時代の大分の町との違いを強調している。

ジャングル公園については、そこが子供のものとなっていることを、特に喜んでいる。さらに、墓地公園の着想を評価し、その整備を主導する上田の創意に敬意を払うと述べ、その着想は非凡であるとしている。

くわえて、火葬場、社会福祉施設、学校等の公園以外の公共施設の充実を紹介し、将来、大分の町が「小型文化都市」になることを期待している。

このように、林は大分の町の近代化を賛美している。しかしながら、末尾においては、林は「必ずしも皮肉ではなかった。」としつつも、「まるで中共の町」との印象を上田に伝えており、大分の町が近代化することは喜んでいるものの、その標準化に違和感を示しているようにも思われる。

**奇妙な底力**

大分川を横切るコンクリートの舞鶴橋も開通した。海岸ドライブ・ウェイによる別府温泉へのドライブはわずか二十分。途中で天下に有名になった高崎山の自然公園がある。山のサルが出て来て人間と遊ぶ公園だ。

「日本キリシタン博物館」という大計画も進行中。

「政治は創作だ」と市長は言う。たしかに創作的才能豊かな市長らしい。高崎山の寺の和尚と協力してサルをならしたのも、ローマ法王に手紙を書いて博物館のため一千ドルの寄付金をもらったのもこの市長だ。私

は色きちがいだと言われました。」と市長は笑う。というのは、すべての新施設を明るく明るくと明色に塗らたてて、町の守旧派をおどろかしたという意味だ。

「市長の反対派はまだできませんかね？」

私は町の在野派と思われる人々に、機会あるごとにたずねて見た。

「市民税が高いのには弱ります。日本一かもしれませんな」

ほとんどの異口同音の返事であった。日本一かどうかは知らぬが、一人二千二百二十八円と「市勢要覧」にある市税は相当高率な税金にちがいない。それでいながら、市長の政策を公然と非難する市民にはついにめぐり会えなかった。市会にも市長反対派せいぜい二人か三人しかいないと言う。大分市民がこの創作的市長とともに、小型文化都市創作の夢を楽しんでいるのであろうか？もしそうだとしたら、今時珍しい平和で幸福な町である。

左翼の勢力も一時は芽生えかけたが、途中で枯れてしまったようだ。元共産党地区委員長はパチンコ屋のボスになり、大分と別府に大パチンコ・チェーンを張り、もうけた金で白蓮女史で有名な赤胴御殿を買取って、いまは新興財閥の一人だと言う。これでは大分の政状はいやでも平和にならざるを得ない。

井上準之助と一万田尚登を、中央財界に送った大分県人は、財政的素養にもめぐまれているのかもしれない。

町の経済についても、楽観的な声のほうが多かった。商店街でも、デフレと不景気をなげく声はほとんど聞こえない。「大分は物価が安いと言って、他県の商人まで集まってきているので、不景気になって、かえって景気が出ましたよ。どうしたわけでしょうね」と自分で不思議がっている商人もいた。

他県からの商況視察者の話によると、これは大分だけでなく、例えば熊本などでも同様だという。近代工業を持たず、前時代からの農産物経済の上に自然に成長した地方都市は、奇妙な底力と抵抗力を持っている。台風に吹きまくられながらも、食糧の自給はどうやらできる。米が不作なら、池田大臣に言われなくとも、自発的に麦を食い、アワを食い、イモを食う先祖伝来の耐乏性を持っている。シイタケと青ダタミとミカンと山の材木を売って、つつましく耐乏しておれば、不景気の風も台風とともにやがては吹き去って行くというような、近代以前の経済原則がまだ残っている町なのかもしれない。

創作的才能豊かな上田の活躍と、上田と市会や市民の良好な関係性等、市政がうまくまわっていることが紹介されている。この評論が執筆されたのは、上田の二期目の終わりであり、戦災復興の成果が概ね見えてきた時期である。

上田の市政が安定し、優れていたことが、この林の評論から確認できる。

次に、林は町の経済にふれている。大分の町は、戦前、製糸業等の立地が若干みられたが、十分な工業化は、戦災復興後になる。1964年（昭和39年）に新産業都市に指定され、その後、工業化が加速することになる。

林が取材、執筆した1955年（昭和30年）の時点では、大分の町は、まさに「農産物経済の上に自然に成長した地方都市」であった。そのような都市には、「底力」があるとの林の指摘は、非常に興味深い。戦災復興都市を分析する上では、重要な視点であると思われる。

### 名物も創作

大分の名物はフグ料理だという。薬味の中にキモをまぜて食うやつを、知事も市長も中学の級友たちも自慢で、私は方々でごちそうになったが、どうもこれは怪しい。私が子供のころのは、フグ料理などというものは全然大分にはなかったからだ。

フグはなんと言っても、下関と博多だろう。歴史が長いから、それだけ味が洗練されている。大分のフグは料理の仕方が荒っぽい。ショウユは濃すぎるし、ネギは太すぎるし、自慢のキモはすこし生くさい。同じ大分県人で主婦之友社長石川数雄医学博士の研究によれば、大分のフグのキモが食えるのは、大分近海にまったく無毒なフグの一種が住んでいるので、別に不思議ではないそうだ。無毒なフグはそれで味もおちる。キモは自慢にならない。もっと下関博多流の料理を研究すべきだ。すこし生まれ故郷をほめすぎたから、せめてフグの悪口でも言っておこう。

しかし考えて見れば、どこの国でも、どこの町でも、名物や名所というものは創作である。土地の者の努力がなければ生まれえない。奈良の大仏も、高崎山のサル公園も、人がつくって名所にした。スイスの山山も別府温泉は人間のつくったものではないが、観光設備とホテルが完備しなければ、国際的名所にはなれぬ。

名物と名所は創作され、歴史と旧跡は発掘される。大分も最近になって、フグ料理を創作し、滝廉太郎とキリシタン大名大友宗麟とデウス堂を発掘した。フランスコ宗麟の発掘はローマ法王を動かし、「日本キリシタン博物館」に結晶しようとしている。これができ上がったら、大名物だ。

と思いながら、東京に帰ってきたら、大分市はまた別府温泉のかげに小さくかすんでしまった。奇妙な町だ。

以上が「週刊朝日」昭和30年1月16日号に掲載された「日本拝見 64 大分市 小型未完成文化都市」である。

林は「すこし生まれ故郷をほめすぎた」と述べていると

おり、本評論では、自らが育った、明治から大正期の大分の町と、戦災復興後の大分の町の対比をつうじて、復興大分市を高く評価していることがわかる。

さらに、林は、上田の創作的才能による「名物と名所の創作」、「歴史と旧跡の発掘」を同様に高く評価している。

### (2) 林房雄の他の著作からの補足的考察

林は、「週刊朝日」の昭和29年10月17日号掲載の「日本拝見 51 高山 生き残った町」<sup>6)</sup>で、次のように述べている。

この「日本の屋根」の頂上に近い盆地に、昭和のはじめまで、鉄道もなく、日本で一番遠い町として孤立していた高山という町には、戦後の日本が失ってしまった何者かが残っているかもしれぬ。戦火に焼かれた日本の都会は、どの町を見ても同じである。高山という町は、何はともあれ、その個性だけはもちつづけているかもしれぬ。

林は、当時、戦火に焼かれた日本の都会は、どの町を見ても同じであり、町の個性が失われていると、戦災復興都市を否定的に捉えていたことがわかる。

また、林は、「緑の日本列島」の「第八章 京都の秋 世界の秘境日本」<sup>7)</sup>において、復興大分市について次のように述べている。

戦後二十年、日本の町々はほとんど復興した。私の故郷大分市は城も侍屋敷ものこっていた古い城下町であり、同時に「大正様式」<sup>注3)</sup>に完全にむしばまれた見ばえのしない地方都市であったが、町の大半が焼かれたために、今は見ちがえるほどの「近代都市」に変わっている。多くの小公園と広場ができ、焼き場や墓場まで美しくなった。

これは、「日本拝見 64 大分市 小型未完成文化都市」から約10年後の1966年に出版されたものである。このように時間が経過した後も、ほぼ同様の見解が述べられており、林が復興大分市を高く評価していたことが確認できる。

### 4. まとめ

林房雄は、自らが育った、明治から大正期の大分の町と、戦災復興後の大分の町の対比を軸にした評論において、復興大分市と上田保を高く評価している。

当時、林は、戦火に焼かれた日本の都会は、どの町を見ても同じであり、個性を失っていると、戦災復興都市を否定的に捉えていたが、大分の町については、戦災復興により美しくなった町の一つであるとしている。それを「焼

き肥り」と表現し、「焼け肥り」できた要因として「農産物経済の上に自然に成長した地方都市」の持つ「底力」の存在を指摘している。このことは、戦災復興都市を分析する上では、重要な視点であると考えている。

さらに、林は創作的才能豊かな上田保による「名物と名所の創作」、「歴史と旧跡の発掘」を高く評価している。

#### 注釈

注1)<sup>10)</sup>林 房雄(はやし ふさお)：昭和時代の小説家。明治36年5月30日生まれ。東京帝大在学中に短編「林檎」を「文芸戦線」に発表し、プロレタリア作家として出発するが、のちに転向。昭和8年小林秀雄らと「文学界」を創刊。戦後は「息子の青春」などの中間小説をかき、「大東亜戦争肯定論」で話題をよんだ。昭和50年10月9日死去。72歳。大分県出身。東京帝大中退。本名は後藤寿夫。作品に「青年」など。

注2)<sup>10)</sup>吉岡 専造(よしおか せんぞう)：昭和～平成時代の写真家。大正5年12月5日生まれ。昭和14年朝日新聞社にはいる。46年出版写真部長を最後に定年退職し、宮内庁より昭和天皇・皇后の撮影を依頼される。同時に吹上御苑撮影も許可され、55年写真集「吹上の自然」を刊行。ほかに「吉田茂」「人間零歳」。東京出身。東京高等工芸(現千葉大)中退。

注3) 大正様式：竹山道雄<sup>注4)</sup>が「京都の一級品」<sup>8)</sup>にて示した、大正の中頃から現れた乱雑な広告や、バラック、安っぽい模倣西洋館等のアンバランスで雑然としたゴミ箱をひっくりかえしたような様相を否定的に捉えた概念。

注4)<sup>10)</sup>竹山 道雄(たけやま みちお)：昭和時代のドイツ文学者、評論家。明治36年7月17日生まれ。ドイツ留学後、一高教授。昭和26年東大教授を退官後は、左右の全体主義を批判する立場から評論活動をおこなった。戦後に発表した小説「ビルマの豎琴」でも知られる。芸術院会員。昭和59年6月16日死去。80歳。大阪出身。東京帝大卒。著作に「昭和の精神史」「剣と十字架」など。

#### 参考文献

- 1) 日高圭一郎：大分市の戦災復興に関する調査研究 その3-復興大分市と上田市長に対する評価について-, 九州産業大学建築都市工学部研究報告, 第4号, pp. 13-20, 2022. 3
- 2) 林房雄：日本拝見 大分 未完成小型文化都市, 週刊朝日, 1月16日号, pp. 32-38, 1955. 1
- 3) 週刊朝日編集部編：日本拝見 東日本編, 角川書店, 1957
- 4) 週刊朝日編集部編：日本拝見 西日本編, 角川書店, 1958
- 5) 大宅壮一：僕の日本拝見, 中央公論社, 1957
- 6) 林房雄：高山 生き残った町, 『日本拝見 西日本編, 角川書店』, 週刊朝日編集部編, pp. 173-175, 1958
- 7) 林房雄：世界の秘境日本, 第八章 京都の秋, 『緑の日本列島』, 文藝春秋, pp. 190-193, 1966
- 8) 竹山道雄：京都の一級品 東山遍歴, 新潮社, 1965
- 9) 三島由紀夫：林房雄論, 新潮社, 1963
- 10) 上田正昭, 西澤潤一, 平山郁夫, 三浦朱門：日本人名辞典(第二版), 講談社, 2001

